

蜜柑

芥川龍之介

ある曇った冬の日暮である。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乗客はいなかった。外をのぞくと、うす暗いプラットホームにも、今日は珍しく見送りの人影さへ跡を絶って、唯、檻（おり）に入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに、吠え立てていた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似つかわしい景色だった。私の頭の中には云いようのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた。私は外套のポケットへじつと両手をつっこんだ儘（まま）、そこにはいつている夕刊を出して見ようと云う元氣さえ起らなかった。

が、やがて発車の笛が鳴った。私はかすかな心の寛（くつろ）ぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずると後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまえていた。所がそれよりも先にけたたましい日和（ひより）下駄の音が、改札口の方から聞え出したと思うと、間もなく車掌の何か云い罵（ののし）る声と共に、私の乗っている二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌しく中へはいって来た、と同時に一つずしりと揺れて、おもむろに汽車は動き出した。一本ずつ眼をくぎって行くプラットホームの柱、置き忘れたような運水車、それから車内の誰かに祝儀の札をいつている赤帽——そういうすべては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後へ倒れて行った。私は漸（ようや）くほっとした心もちになって、巻煙草に火をつけながら、始めて懶（ものう）い睡（まぶた）をあげて、前の席に腰を下していた小娘の顔を一瞥（いちべつ）した。

それは油気のない髪をひつつめの銀杏返（いちしようがえ）しに結って、横なでの痕のある鞆（ひび）だらけの両頬を気持の悪い程赤く火照（ほて）らせた、如何にも田舎者（いなかももの）らしい娘だった。しかも垢じみた萌黄色（もえぎいろ）の毛糸の襟巻がだらりと垂れ下った膝の上には、大きな風呂敷包みがあった。その又包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしっかりと握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかった。それから彼女の服装が不潔なものもやはり不快だった。最後にその二等と三等との区別さへえわきまえない愚鈍な心が腹立たしかった。だから巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいという心もちもあって、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。すると其時夕刊の紙面に落ちていた外光が、突然電燈の光に変わって、刷（すり）の悪い何欄かの活字が意外な位鮮（あざやか）に私の眼の前へ浮んで来た。いうまでもなく汽車は今、横須賀線に多い隧道（トンネル）の最初のそれへはいったのである。

しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱を慰むべく、世間は余りに平凡な出来事ばかりで持ち切っていた。講和問題、新婦新郎、流職（とくし

よく)事件、死亡広告——私は隧道へはいった一瞬間、汽車の走っている方向が逆になつたような錯覚を感じながら、それらの索漠とした記事から記事へ殆(ほとんど)機械的に眼を通した。が、その間も勿論あの小娘が、恰(あたか)も卑俗な現実を人間にしたような面持ちで、私の前に座っている事を絶えず意識せずにはいられなかった。この隧道の中の汽車と、この田舎者の小娘と、そうして又この平凡な記事に埋まっている夕刊と、——これが象徴でなくて何であろう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であろう。私は一切がくだらなくなつて、読みかけた夕刊を抛(はふ)り出すと、又窓枠に頭を靠(もた)せながら、死んだように眼をつぶつて、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅(おびやか)されたような心もちがして、思わずあたりを見まわすと、何時(いつ)の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頻(しきり)に窓を開けようとしている。が、重い硝子戸(ガラスド)は中々思うようにあがらないらしい。あの鞆(ひび)だらけの頬は愈(いよいよ)赤くなつて、時々鼻洩(はな)をすすりこむ音が、小さな息の切れる声と一緒に、せわしなく耳へはいつて来る。これは勿論私にも、幾分ながら同情を惹(ひ)くに足るものには相違なかつた。しかし汽車が今まさに隧道(トンネル)の口へさしかかろうとしている事は、暮色の中に枯草ばかり明(あかる)い両側の山腹が、間近く窓側に迫つて来たのでも、すぐに合点(がてん)の行く事であつた。にも関わらずこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸を下そうとする、——その理由が私には呑みこめなかつた。いや、それが私には、単にこの小娘の氣まぐれだとか考えられなかつた。だから私は腹の底に依然として険しい感情を蓄えながら、あの霜焼けの手が硝子戸を擡(もた)げようとして悪戦苦闘する容子(ようす)を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るような冷酷な眼で眺めていた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうぱたりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、煤(すす)を溶したようなどす黒い空氣が、俄(にわか)に息苦しい煙になつて、濛々(もうもう)と車内へ漲(みなぎ)り出した。元来咽喉(のど)を害していた私は、手巾(ハンケチ)を顔に当てる暇さえなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、殆(ほとんど)息もつけない程咳(せ)きこまなければならなかつた。が、小娘は私に頓着する氣色(けしき)も見えず、窓から外へ首をのびして、闇を吹く風に銀杏返(いちじょうがえ)しの鬢(びん)の毛をそよがせながら、じつと汽車の進む方向を見やっている。その姿を煤煙(ばいえん)と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明るくなって、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷(ひやや)かに流れこんで来なかつたなら、漸(ようやく)咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかつたのである。

しかし汽車はその時分には、もう安々と隧道(トンネル)をすべりぬけて、枯草の山と山との間に挟まれた、或貧しい町はずれの踏切りに通りかかつていた。踏切りの近くには、いずれも見すばらしい藁屋根や瓦屋根がごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであるう、唯一旒(いちりゆう)のうす白い旗が懶(ものう)げに暮色を揺(ゆす)つていた。やつと隧道を出たと思う——その時その蕭索(そうさく)とした踏切りの柵の向うに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立っているのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思う程、そろつて背が低かつた。そうして又この町はず

れの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を挙げるが早いか、いたいけな喉を高く反（そ）らせて、何とも意味の分らない喊声（かんせい）を一生懸命に迸（ほとぼし）らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのぼして、勢よく左右に振ったと思うと、忽ち心を躍らすばかり暖（あたたか）な日の色に染まっている蜜柑（みかん）が凡そ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空から降って来た。私は思はず息を呑んだ。そうして刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴（おもむ）こうとしている小娘は、その懐に蔵（かく）して幾顆（いくか）の蜜柑を窓から投（な）げて、わざわざ踏切りまで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。

暮色を帯びた町はずれの踏切りと、小鳥のように声を挙げた三人の子供たちと、そうしてその上に乱落する鮮（あざやか）な蜜柑の色と——すべては汽車の窓の外に、瞬（またた）く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、或得（えたい）の知れない朗（ほがらか）な心もちが湧き上って来るのを意識した。私は昂然と頭を挙げて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘は何時（いつ）かもう私の前の席に返って、あいかわらず鞆（ひび）だらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、大きな風呂敷包みを抱えた手に、しっかりと三等切符を握っている。……………

私はこの時始めて、云いようのない疲労と倦怠とを、そうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅（わず）かに忘れる事が出来たのである。

（大正八年四月）

底本…「現代日本文学大系」㊦ 芥川龍之介集「筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

入力：j. utiyama

校正：野口英司

1998年3月16日公開

2005年10月18日修正